

TOSHIRO HATA PRESENTS

波多利朗の

## Funky Corner

文・撮影●波多利朗 text and photo by Hata Toshiro  
 (URL) <http://www.funkygoods.com/>  
 (E-Mail) [catty@mxp.mesh.ne.jp](mailto:catty@mxp.mesh.ne.jp)


 じっくり  
 続く

## 濃い系Psionの世界 (其の6) Psion MC400と Psionの周辺機器について

### レトロテレビゲーム機の世界

今や携帯電話にも「ドラゴンクエスト」がブライインストールされる時代。通勤電車の中でRPGをプレイするくらいは常識の世の中だ。とは言っても、筆者はあまりテレビゲームは好きじゃない。人並みにプレステ(2じゃなくて初代ね)を持っているものの、「鉄拳」とか「リッジレーサー」を一通りこなした後、お蔵入りしたままだ。パソコンのゲームでも、最近の3Dグラフィックスがバリバリ動くようなものは、ほとんどやったことがない。

日常生活において人の顔を覚えるのが苦手な筆者であるからして、最近のRPGのように多数の登場人物が出てきては、頭がパンクしてとても付いて行けない。何を好んで、遊びの中でも複雑な人間関係を理解しなくてはならんのや!と思ってしまう。また、車のレースゲーム等も、運動神経が鈍ってしまった体がもはや受け付けられない。郊外の田舎道をチンクェチェント(FIAT 500)でノンビリと流すのが趣味の筆者にとって、首都高でのバトルは重すぎる。というわけで、最近のリアリティを追求したゲームは、かえって疲れてしまう波多利朗であった。

そんな中、密かに凝っているのが、TVゲーム黎明期のレトロテレビゲームである。テニス、サッカー、スカッシュ等、要はラケットでボールを打つのが基本のこれらのゲーム画面を見ていると、何となく「安心」してしまう

のが不思議である。もとよりテトリス以上複雑なゲームはプレイしない筆者のこと、これくらい単純なゲームのほうが「癒し」効果があって良い。さらに、これらのゲーム機の外観・操作系は、実にアナログチックで好感が持てる。というわけで、最近では70年代のレトロゲーム機が蓄積してしまった。以下、その一部をご紹介してみる。

(株)正和「VIDEO ATTACK」MODEL TG-7800(写真a)  
 1977年(昭和52年)発売のテニスゲーム機。TENNIS、HOCKEY、SQUASHそしてPRACTICEの4種類のゲームが楽しめる構成となっているが、まあ内容的には古典的なテニスゲームがベースとなっている。赤白ツートンカラーの筐体はどことなく弁当箱を連想し、大変にレトロな雰囲気だ。左右のツマミを回してラケットをコントロールする。単二乾電池6本もしくはACアダプタによる駆動。手書きの絵が記載されたペラペラの6Pの取り扱い説明書付き。

#### TOMY「TV FUN MODEL 501」(写真b)

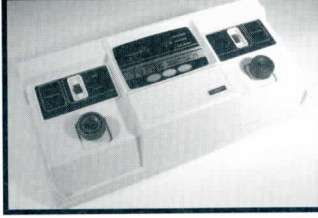
株式会社トミーが1977年(昭和52年)に発売したゲーム機。サッカー、テニス、スカッシュの3種類のゲームがカラーで楽しめた。テクニックによりラケットサイズが3種類に変えられるというギミック付き。ACアダプタ動作で電池不要。白と黒を基調としたゲーム機本体は極めてシンプルなデザインで、70年代SF映画の雰囲気漂う。

## a 正和「VIDEO ATTACK」



赤と白の配色がレトロな「VIDEO ATTACK」。昭和52年発売の製品

## b TOMY「TV FUN MODEL 501」



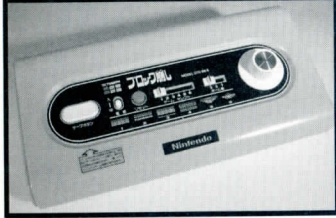
3種類のゲームが楽しめるトミーのゲーム機。昭和52年発売

## c TOMY「TV FUN MODEL 701」



TV FUN 501の上位バージョン。ジョイスティック搭載モデル。昭和52年発売

## d 任天堂「ブロック崩し」Model CTG-BK6



昭和54年発売のブロック崩し専用マシン！オレンジ色のボディが郷愁を誘う!!!

## e エポック社「システム10」



妙に丸っこくてセクシーな形の、エポック社システム10。昭和52年の発売

## f エポック社「カセットビジョン」



カートリッジ交換式テレビゲームの名機、エポック社のカセットビジョン。昭和56年の発売

## TOMY「TV FUN MODEL 701」(写真c)

MODEL 501の上位バージョン。1977年（昭和52年）発売のゲーム機。1台で8種類（プラクティス、スカッシュ、テニス、ホッケー、サッカー、バスケット1、バスケット2、グリッドボール）が楽しめた。操作系には「画期的なジョイスティック・フルコントローラ」を搭載と、箱にもでかでかと書かれている名機。ACアダプタ使用で電源は不要。

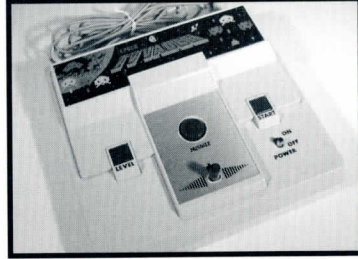
## 任天堂「ブロック崩し」Model CTG-BK6 (写真d)

1979年（昭和54年）発売の、ブロック崩し専用ゲームマシン。当時の価格はおそらく8,300円程度と思われる。6種類のパターンを選択可能で、サーブボタンでボールを画面上方より放出し、ツマミでラケットを水平に移動させて跳ね返すだけの、超単純ゲームである。ボールの個数は3、5、7個と選択可能。レトロ極まりないオレンジ色のボディが郷愁を誘う。取り説によれば、LC11個とIC11個で構成されているようだ。ACアダプタのみの駆動。しかし、「ブロック崩しゲーム」だけでこの大きさとは……Sigh……。

## エポック社「システム10」(写真e)

1977年（昭和52年）発売のエポック社のTVゲーム機。ピンポン、ワンマンゲーム、テニス、サッカー、クレー射撃等、全部で10種類のゲームが楽しめた。ゲーム機本体の外観と配色が、何とも言えずレトロ。ラケットコントローラは左右に2個ずつ、4個配置されている。単一乾電池

## g エポック社「テレビベーター」



アーケード版を期待して購入し、がっかりした人も多かったエポック社のテレビベーター。昭和55年の発売

表 MC400とMC600のスペック比較

モデル名称	MC400	MC600
メーカー	Psion	Psion
発売年	1989/09/26	1989/09/26
CPU	intel 80C86 7.68MHz	intel 80C86 4.77MHz / 8MHz (動作速度切替え可能)
内蔵メモリ	256KB (Mドライブ)	Flash : 256KB (Dドライブ) Work-RAM : 768KB (640KBはMS-DOS動作用) RAMDISK : 1MB (Cドライブ)
ディスプレイ	640×200 dot モノクロCGA LCD Active Area : 210mm×130mm	640×200 dot モノクロCGA LCD Active Area : 210mm×130mm
キーボード	QWERTY 61キー +8補助キー	QWERTY 61キー +25補助キー
I/Oポート	Serial×1、Parallel×1、MIC端子、Speaker端子	Serial×1 (COM1)、Parallel×1 (LPT1)、外付けFDDドライブコネクタ、外部CGAモニタ接続端子
SSD	4スロット	4スロット
バッテリー	メイン：単三型電池×8本 サブ：CR2016	メイン：単三型電池×8本 サブ：CR2016
ACアダプタ	別売り (12V DC)	別売り (12V DC)
大きさ	314 (W) ×227 (D) ×49 (H) mm	314 (W) ×227 (D) ×49 (H) mm
本体重量	1.90kg (バッテリー含む)	2.16kg (バッテリー含む)
搭載OS	EPOC OS	MS-DOS Ver 3.22 ROM Version
内蔵ソフト	Alam、Calc、Diary、Fileman、Linkm、Pdb、Term、Text	Lap-link、Alias、Editor、PIM Software

4本で駆動。フリーピストルとクレー射撃用に専用の光線銃がセットされている。

## エポック社「カセットビジョン」(写真f)

カセット交換方式を採用することで、1台のゲーム機で何種類ものゲームを楽しめるようになった記念すべき逸品。1981年(昭和56年)発売。ACアダプタ電源で電池は不要。操作ダイヤル4個、ブッシュボタン4個、操作レバー2本を搭載し、メカメカしい雰囲気を演出していた。高機能化に伴い、プレイ可能なゲームの内容も、今までのテニスゲーム系とは一線を画すレベルであった。

## エポック社「テレビベーター」(写真g)

1980年(昭和55年)発売のインベーターゲーム専用マシン。当時喫茶店を中心に爆発的なブームを巻き起こしたインベーターゲームの家庭版である。しかへし、やった人なら覚えていると思うが、実物とはかなりかけ離れた内容で、大枚はたいて購入してガッカリした人も多かったのでは? 当時の価格は1万7,000円前後。今ではレア物としてコレクターの間では珍重されている迷機。



……キリが無いので、この辺にて打ち止めとしておこう。

さて、今回はまた「濃い系Psionの世界」と題して、商用的には失敗作であったPsionのMobile Computerシリーズの中のMC400をメインに、周辺機器も含めてご紹介する。

## MC400というマシン

ちょうど1年前、2003年夏号の本誌上において、Psion空前絶後の変態マシンと称してMC600をご紹介したが、MC400はPsionのMobile Computerシリーズとしてリリースされた中で、MC600よりもマトモでPsionらしい製品である。MC600は、何をトチ狂ったのかOSにMS-DOSを採用した謎ば〜機そのものであり、とてもあのPsionの製品とは思えなかったのだが、MC400ではその後のEPOC OSの基礎とも言える、Psion純正マルチタスクOSを搭載している。とはいっても、Series 3以降の洗練されたものとは異なり、MC400に用いられているものは原始EPOCとも言えるものだ。年代的にはHC110よりも前の製品となるこのマシンは、ウィンドウ関数等のライブラリの仕様が後のSeries 3以降の製品とかなり異なり、またグラフ

001



**Psion MC400の外観**  
PsionのMobile Computer Series、MC400。1989年の発売ながら、GUIを採用した先進的なモバイルパソコンであった。しかし、本体はかなりでかい!

002



**MC400(右)とMC600(左)**  
この2機種は兄弟関係とも言えるが、仕様面ではまったく性格が異なる。MC400はPsion純正マルチタスクOS搭載のGUIマシン。片や「あの」MS-DOS Ver3.2を搭載した謎ば〜もどきマシン

ィックコマンドの細部仕様の公開が不十分ということもあって、ソフト開発という面ではハンディがあるマシンと言える(001)。

さて、PsionのMobile Computer MCシリーズであるが、200、400、600の3台がリリースされている。このうち、MC200とMC400は兄弟分のようなもので、LCDパネルの仕様が異なっているだけの相違しかない。一方、MC400とMC600とは搭載OSとH/W構成が異なっており、同一シリーズとしてはかなり異質な関係になっている。MC200はLCDパネルに640×200ドットのブルー/ホワイトSTN液晶を搭載していたが、MC400では640×400ドットに拡張され、液晶も白黒STNに変更されている。

MC400とMC600との仕様比較表を下表に示す(002)。

## MC400の構造

次にMC400のハードウェア構成を、MC600と比較して見てみよう。先ず外観であるが、同一シリーズの製品だけあって「クリソツ」だ。ロゴプレートに記載されている型番以外は、まったくと言って良いほど相違は見受けられない。取っ手兼スタンドのハンドルが付いている点も同じである(003)。

パネルを開いてみると、この2機種が異なった製品であ

003



MC400 (手前)とMC600 (奥)  
MC400 (手前)とMC600 (奥)とは、本体形状、ロゴプレート的位置等、外観はほとんど同じである。わずかにモデル番号の記載のみが異なっている

005



MC400キーボード上の「Psion」キーとキーボード  
Psion純正マルチタスクOS搭載の証である「Psion」キー。DOSマシンのMC600では「Alt」キーが配置されていた場所である。キーボードの奥には広大なキーボードが配置されている

ることが判る。まず目に付くのは、MC400の中央に搭載されたタッチパッドだ。MC600では、この部分にファンクションキーとファンクションキーの内容を記載するプレート及び電源スイッチ等が搭載されていたが、MC400には140×48mmのタッチパッドが占有している。キーボード右上に8個並んだキーパッドはMC600と同じであるが、MC600の「INSERT」、「PALLETE」の両キーがそれぞれ「TASK」、「RECORD」に変わっている点が異なる(004)。

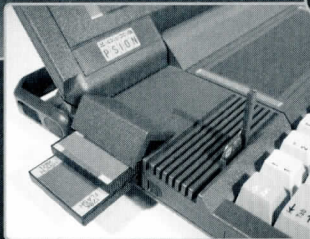
本体内蔵のバックアップ電池はMC600同様キーボード左側のレバーを持ち上げて搭載する。使用する電池はPsionユーザーにはお馴染みの「CR1620」だ。このバッテリー格納位置は、トーシロには絶対に判らないと言っても過言ではないほど、判りにくい。キーボードのハードウェア的な作りは、MC600同様しっかりとしたものだ。デスクトップPCのキーボード並のピッチをストロークを確保しており、タッチタイプは快適に行える。キーの総数は61個で、MC600と同一であるが(ただしファンクションキーは除く)、搭載OSが異なるということもあり、一部のキー配置が異なる。MC400では「On」と「Esc」が同じキーにアサインされており、また「Alt」キーの代わりに「Psion」キー(カップ&ソーサーの記号が書かれているキー)が搭載されている(005)。

004



MC400 (右)とMC600 (左)のキーボードの比較  
MC600 (左)とは異なり、MC400 (右)には大きなタッチパッドが搭載されている。またキー配置も微妙に異なっているのが判る。キーボードは両者ともストロークが深く、極めて押しやすい

006



MC400のSSDスロット

本体左右のスロットにそれぞれ2枚ずつ、合計4枚ものSSDを搭載可能。そのうち左側上スロットにはSYSTEM DISKを挿入して使用する。スロット手前にはバックアップ電池ホルダーが見える

007



MC400のSYSTEM DISKのアップ

これを無くしたりフォーマットしたりすると、MC400が起動できなくなる大切なSSD。128KBのFLASH DISKで、フォーマットするな!とデカデカと記載される。SYSTEMのVersionは1.0。1989年製造

SSDドライブは本体左右に合計4スロット分設けられており、この点もMC600と同じである。ただし左側ドライブの上部スロットには「SYSTEM DISK」を挿入しなくてはならない。SYSTEM DISKは128KBのFLASH SSDで、カード裏面には「DO NOT FORMAT」と「デカデカ」と記載されている。ちなみに本機に搭載されていたSYSTEMは、1989年の日付けを持つVERSION 1.0であった(006、007)。

外部I/F端子は、本体背面左右に2つ設けられている。左側スロットにはI/Fモジュールが搭載されておらず、増設可能となっている。右側スロットにはRS232 SerialとPrinter Parallelの各ポートが搭載される。使用されているモジュールはMC600と同一のものだ。I/Fモジュールは、



008

本体背面スロットに搭載されるI/Fモジュール

本体裏面のボタンを押すことで、モジュールごと取り外すことが可能。本機に搭載されていたモジュールは、RS232 SerialとPrinter Parallelポートモジュール

本体裏面のボタンを押すことにより取り外すことができる。この辺りの拡張性の高さは、さすがである (008)。

本体右側に設けられたスロットには、ACアダプタ入力、スピーカ、マイクの各コネクタが並ぶ。これはMC600には無かったもので、標準で音源をサポートしていたPsionマシンらしい。ちなみにMC600では、このスロットにはACアダプタ端子と外部モニタ端子が格納されていた。ACアダプタには12V、800mA出力のものを使用するが、これは既出のHC110に使用したアダプタをそのまま使うことが可能だ (009)。

バッテリー搭載方法もMC600と同一だ。銃に弾丸を込めるがごとく、8本のアルカリ乾電池を挿入するタイプで、マニア心をくすぐる優れた演出だと言えよう。なお、本体裏面の銘板には

「MULTI-TASKING OPERATING SYSTEM」、  
「GRAPHIC USER INTERFACE」、  
「256KBYTE RAM」といった記述が誇らしげに記載されている。このマシンが世に出た1989年は、まだWindows3.0すら世に出ておらず、巷のマシンもほとんどがMS-DOSベースであった。ポータブルPCでは、東芝のDynaBookが19万円台で衝撃的なデビューを行い、ベストセラーになったものである。このような時代に、乾電池で動作するGUIマシンをリリースしたPsionは、やはりかなり先進的なメーカーであったと言えるであろう (010)。

さて、MC400の内部ドライブ構成を見てみよう。非常にシンプルな構成で各ドライブ名とスロットとの関係は以下のようにになっている。

- ・Aドライブ：本体左上スロット／システムファイル
- ・Bドライブ：本体左下スロット／汎用ドライブ
- ・Cドライブ：本体右上スロット／汎用ドライブ
- ・Dドライブ：本体右下スロット／汎用ドライブ
- ・Mドライブ：内蔵RAMドライブ (256KB)

MC400を起動して使用できるアプリケーションは、全



009

本体右側スロットの比較

上がMC400、下がMC600。MC400にはスピーカ、マイク等音源関連のコネクタが並ぶ。一方内蔵音源を持たないMC600は、外部モニタ出力コネクタとなっている



010

MC400のバッテリー格納方法

MC600と同様、8本の単三乾電池もしくはNi-Cd充電電池で動作する。電池の搭載方法も、MC600と同じくマニアックな仕様

てAドライブにアサインされているSSDに格納されている。標準で格納されているアプリケーションファイル(.appファイル)は、下記の8個である。

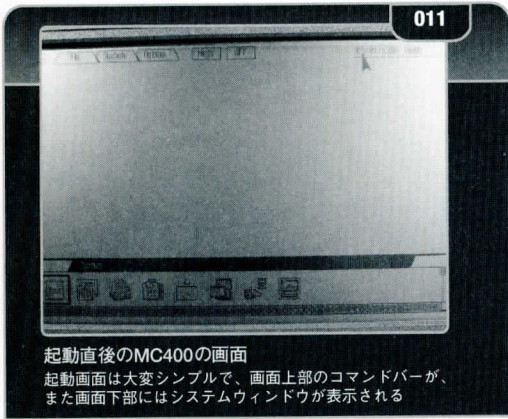
- ・alarm.app (アラーム)
- ・calc.app (電卓)
- ・diary.app (ダイアリー／スケジューラ)
- ・flman.app (ファイルマネージャ)
- ・link.app (PCとのリンクソフト)
- ・pdb.app (パーソナルデータベース)
- ・term.app (ターミナルソフト)
- ・tp.app (テキストプロセッサ)

## MC400の操作方法

MC400の電源を投入すると、先ず最初に以下のクレジットが表示される。

PSION GRAPHIC USER INTERFACE  
(C) 1989 - 90 Psion PLC

一番最初の電源投入時には、続いてバッテリーの種類を選択する画面が現れる。バッテリーは「アルカリ乾電池」「Ni-Cd 600mAh」もしくは「Ni-Cd 1Ah」のいずれかが選択可能だ。



**起動直後のMC400の画面**  
起動画面は大変シンプルで、画面上部のコマンドバーが、また画面下部にはシステムウィンドウが表示される

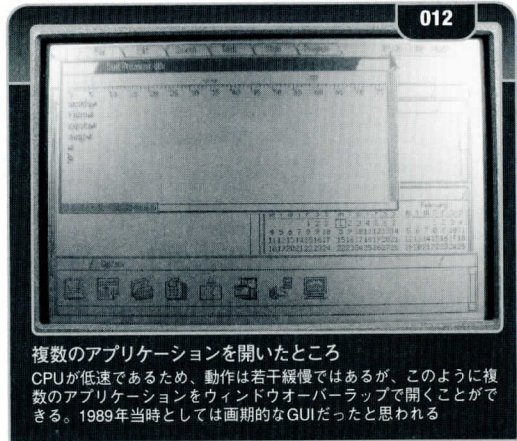
Battery Type  
Alkaline◆ NI-CAD 600mAh◇ NI-CAD 1Ah◇

以上の設定を終えると、Windowsで言うところのデスクトップ画面が現れる。デスクトップ自体は大変シンプルなI/Fとなっている。画面上部左側には「コマンドバー」と呼ばれるタブが並んでいる。また、画面上部右側には日時とバッテリー残量が表示される (011)。画面下にはウィンドウが表示される。初期状態では、System Windowが表示されており、以下のアプリケーションアイコンがインストールされている (012)。

さて、一番最初にMC400を使用する際に戸惑うのは、ポインタの動作と電源の切り方であろう。ポインタは現代のノートパソコンにも搭載されているタッチパッドを用いて移動するが、使い方が若干異なる。ポインタは通常は表示されておらず、タッチパッド上で指を動かしても何も反応しない。ポインタを表示させるには、表示させたい位置に対応して、タッチパッド上の位置を軽く押す。例えば画面左上にあるコマンドバーの「File」の詳細を表示させたいのであれば、タッチパッドの左上を押せば良い。すると三角形の黒いポインタが表示される。このポインタは、「File」タブの上に来ると白く変化する。この状態でさらにパッドを軽く押し込むと、「File」タブのメニューが表示されるといった仕組みである。慣れるまでには少し時間がかかるインターフェースだ。

MC400には電源スイッチは「On」のみ搭載されている。電源を切るには、画面上部のコマンドバーにある「OFF」をクリックするか、もしくは「Control」+「Psion」+「1」キーを同時に押す。これも慣れないとわからない。

画面上部のコマンドバーは、キーボードでも操作することが可能である。コマンドバーには「File」「System」「Options」「Hints」「OFF」の5つのタブが並んでいるが、



**複数のアプリケーションを開いたところ**  
CPUが低速であるため、動作は若干緩慢ではあるが、このように複数のアプリケーションをウィンドウオーバーラップで開くことができる。1989年当時としては画期的なGUIだったと思われる

それぞれ「Psion」+「1」～「5」のキーに対応している。これに慣れれば、ポインタを操作しなくてもメニューを出すことができる。ちなみにこの方法では「Psion」+「5」キーでも電源をOFFにすることができる。

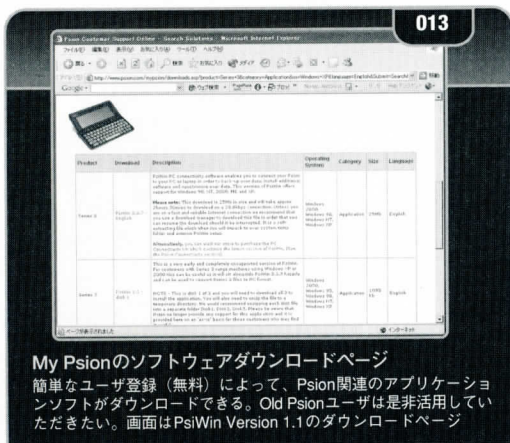
## デスクトップPCとの 接続方法

次にデスクトップPCとの接続方法について見てみよう。最近では、こういったOld Psionの情報次第に少なくなってきた。MC400のように、ストレージデバイスとして特殊な物を搭載している製品では、PCとの接続方法が判らないと、それこそ手も足も出なくなってしまう。というわけで、Old Psion救済計画の一環として、Linkソフトの設定方法を述べておく。

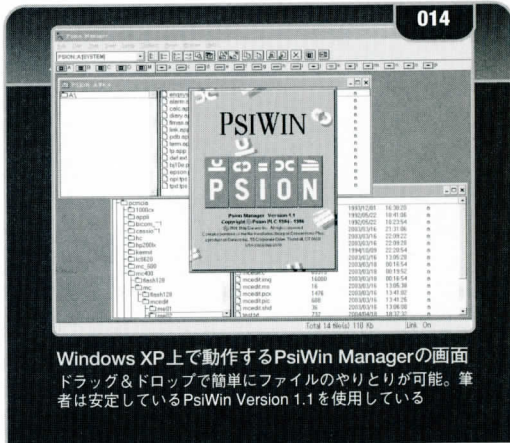
Windows上でPsion端末とファイルのやりとりを行うには、良く知られているPsiWin (サイウイン) を用いるのが一般的である。昔は有償ソフトであったPsiWinも、今ではWeb上から無償でダウンロードすることができる。ソフトを入手するには、先ずPsionの公式Webサイトにアクセスし、下記URLにてユーザ登録を行う。登録は無料でできる (013)。

<http://www.pSION.com/mypsion/Login.asp>

ユーザ登録したIDでログインすると、「My Psion」ページに入ることができる。ここで「Software Downloads - drivers, upgrades and applications」を選択すると、検索ページに入る。MC400のような古いマシンは、すでにプロダクト一覧から削除されてしまっているため、ここではPsion Series 3あたりを選択しておこう。検索結果では、PsiWin 2.3.3と1.1の両方が利用可能と出てくるが、安定して使用することができるPsiWin 1.1をダウンロードして



**My Psionのソフトウェアダウンロードページ**  
 簡単なユーザ登録（無料）によって、Psion関連のアプリケーションソフトがダウンロードできる。Old Psionユーザは是非活用していただきたい。画面はPsiWin Version 1.1のダウンロードページ



**Windows XP上で動作するPsiWin Managerの画面**  
 ドラッグ&ドロップで簡単にファイルのやりとりが可能。筆者は安定しているPsiWin Version 1.1を使用している

おく。FDイメージになっており、3つのファイルを落とす必要がある。

さて、ソフトを入手しPCにインストールしたら、次はMC400とPCとの接続だ。接続ケーブルにはPsiWin専用のシリアルケーブルを用いる。Series 3のようなOld Psionには、ポッドを搭載したRS-232Cシリアルリンクケーブルを使用するが、MC400ではポッドは不要で、Psion側のコネクタ形状が丸いケーブルを使用する。MC400本体背面右側に格納された拡張モジュールの「RS-232 Serial」と書かれたコネクタとPCとを専用ケーブルで接続すれば完了だ。

ここまで準備ができれば後は簡単で、MC400側の「Link」アプリケーション（WindowのPCとMC400がケーブルで接続されているアイコン）を起動させてから、PCのPsiWin Managerを走らせれば良い。MC400の場合、ボーレートは19200まで対応できている。PsiWinマネージャ上では、PC側とMC400側のドライブ構成がエクスプローラ風に表示されるので、ファイルをドラッグ&ドロップして受け渡しを行う。PsiWin Manager上では、MC400にはA、B、C、D、Mの各ドライブが見えている。このうち、A～DはSSDのドライブスロットに対応し、Mは内蔵のメモリとなっている（014）。

## MC400で日本語表示… …ってマジっすか???

さて、ここまで来ると次はお約束の日本語化である。まさかMC400のようなマイナーを通り越したカルトマシンで日本語が表示できる訳が無いだろうとお思いになる方も多いだろうが、そこは柴隠上人 稀瑠冥閻守 (Kerberos) 氏のこと。そこに端末があれば日本語を表示させないと済まない廃人である。しっかりと日本語化に取り組んで

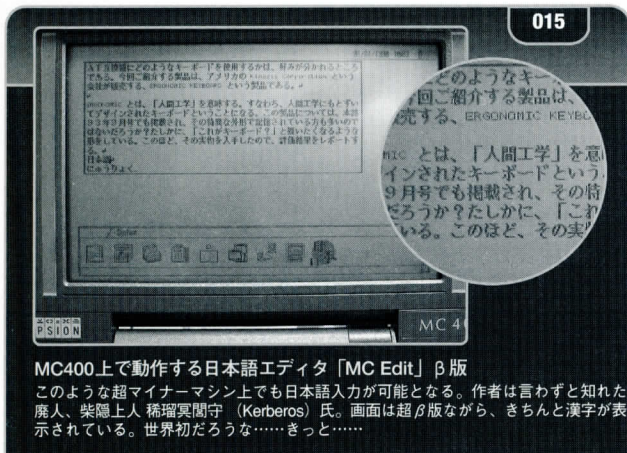
いるから、世も末だな……。

とはいっても、このMC400というマシン、かなり特殊で仕様も完全に公開されていないため、日本語化には想像を絶する艱難辛苦を強いられている。冒頭でも少し触れたが、ウィンドウライブラリのAPIが公開されていないため、プログラミングするに当たっては謎の部分も多い。このAPIの非公開部分については、世界各国の廃人も不満に思っているようで、下記URLの管理者もかなり頭に来ているようなので、ご参考にご覧になっていただきたい。

<http://home.c2i.net/trygveh/mc400/index.html>

このページにも記載されているように、GETEVENTコマンドやグラフィックス関連コマンド、そしてメモリアロケーションの詳細がSDKでも明らかになっていないのである。柴隠上人 稀瑠冥閻守 (Kerberos) 氏はこのようなハンディを負いつつ、ついにMC400上での日本語入力を実現した！ エディタはまだ開発途上であるが、もうここまでやれば後は何も言うことがない。Organiser IIに日本語を表示した時から、氏はどこか狂っていると思っていたが、ここまでやれば立派である……Sigh……（015）

それはさておき、PsionのMCシリーズは商業的には失敗であった。この原因を筆者なりに考えるに、まずMC200、400のグラフィックスコマンド部分の非公開が上げられる。せっかく当時としては画期的なGUIを搭載していたマシンであったのにもかかわらず、利用できるソフトはマシンにデフォルトでインストールされているアプリケーションだけでは、普及するはずもなかった。さらに、MS-DOSを採用したMC600に至っては、当時のPsionユーザからおそらくは総スカンを食ったのも想像に難くない。以上は幾分穿った見方かもしれないが、あながち間違っているとも思えないのである。



015



016

MC400上で動作する日本語エディタ「MC Edit」β版  
 このような超マイナーマシン上でも日本語入力が可能となる。作者は言わずと知れた  
 廃人、笑福上人 稀瑠璃関守 (Kerberos) 氏。画面は超β版ながら、きちんと漢字が表  
 示されている。世界初だろうな……きつと……

Cyclone Driveの商品構成  
 FDD本体、ACアダプタ、専用接続ケーブル、ド  
 ライバFD、取り扱い説明書から構成される。  
 Psion周辺機器としては極めて珍しいもの

## Psion用FDD、 Cyclone Drive

さて、若干スペースができたので、Psionの周辺機器を  
 いくつかご紹介しておこう。まずは、Psion用の外付け  
 FDユニット、Cyclone Driveである。

フロッピーという記憶媒体はすでに使われなくなって  
 きており、最近のPCではドライブさえ付いていないのが  
 当たり前となっている。3.5インチのFDですらこうである  
 から、5.25インチや8インチのメディアなど、それこそ見  
 たことはあるが触ったことはない人もいだろう。もとも  
 と謎ば〜機の類にFDDが付属していることは希であり、  
 ほとんどの機種はシリアル接続でファイルのやり取りを  
 行っていた。PCMCIA規格のカードが使える機種であれ  
 ば、PCカードを用いるという方法も使用できた。しかし、  
 PsionのようなSSDという特殊仕様のデバイスを使用し  
 ているマシンでは、シリアル接続以外考えられなかったの  
 も事実である。

ここにご紹介するCyclone Driveは、Psion関連のソフ  
 トウェアを開発・販売していたPurple Software製の外付  
 けFDドライブユニットである。対象となる製品はPsion  
 Series 3a、3c、Siena、Workaboutと、PsionのOEM製品  
 であるAcon Pocketbookとなっている。これらOld Psion  
 シリーズにFDドライブを接続できる製品としては、この  
 Cyclone Driveしか発売されていなかったのではないだろ  
 うか? ちなみにこのドライブも現在となつては激レア  
 商品であり、ほとんど見かけることがない。SSDという  
 特殊仕様のデバイスを搭載していたOld Psionにとって、  
 FDによるファイルの受け渡しが行えるのは大変便利であ  
 ったに違いない。なお、今回入手したCyclone Driveは、  
 1996年製造のものであった (016)。

Cyclone Driveは、FDD本体、ACアダプタ、接続ケー

ブルそしてドライブソフトウェアFDで構成される。FD  
 ドライブ本体は106×240×35mmという細長い筐体で、鉄  
 製ケースのため800gもの重量がある。まるで最近のサブ  
 ノートパソコン並の重さだ! 普通、モバイル周辺装置  
 の場合にはバッテリー駆動できるものが多いのだが、  
 Cyclone Driveは基本的にACアダプタを用いて使用する。  
 今回入手できなかったのだが、モバイルユースも考慮し  
 たオプションのバッテリーパックも存在していたよう  
 だ。ACアダプタであるが、イギリス仕様のため  
 240V入力となっている。シリーズレギュレータ  
 のため、こちらも呆れるほど重い。日本で使用す  
 る場合には、秋葉原で売っている可変スイッチングACア  
 ダプタを流用する。ちなみに出力は外側マイナス極性の  
 5Vだ。

FDD本体背面には、電源スイッチとACアダプタコネ  
 クタ及びPsionと接続するためのケーブルコネクタが並ん  
 である。Psionとの接続は、付属の専用ケーブルを用い  
 る。FDD側端子はD-Sub 9Pinであり、Psion側端子は  
 Series 3a以降に搭載される薄型コネクタだ。今回は内蔵  
 SSDすらも搭載されていない超小型Psion、Sienaに接続  
 してみることにしよう (017)。

Cyclone Driveを用いるにはデバイスドライバをインス  
 トールする必要がある。方法は簡単で、Cyclone Driveに  
 付属のFDをCyclone Driveに入れた状態で電源を投入す  
 れば良い。ドライブはFDの内部に格納されたデバイスド  
 ライバを自動的に読みとり、以降はPsionとの接続が可能  
 となる。この状態でSienaの電源を投入すると、System  
 スクリーン上に「IMG」アイコンが現れ、その下に  
 「Cyclone[A]」というテキストが表示される。Psion Siena  
 では、Cyclone Driveは「A」として認識されるが、Series  
 3a等では「C」として認識されるようになっている。後は







017

Psion Sienaに接続したCyclone Drive SSDスロットさえ持たないSienaに、外付けFDDを接続するの図。小さなSienaと比較すると、Cyclone Driveの図体の大きなこと！



018

Sienaの画面上に出力されたCyclone Drive

Cyclone Driveは、SienaではAドライブとして認識される。デバイスドライバがインストールされると、Sienaの画面上の「IMG」アイコンに「Cyclone」が追加される



019

Psion Organiser II用メモリアダプタ

Psion用の怪しい周辺機器、メモリアダプタの外観。何のことは無い、Organiser IIのメモリバックスロットに装着し汎用のEPROMを使用できるようにするアダプタである

ファイルマネージャを用いて、FDとPsionとの間でやり取りを行うことが可能となる。使用できるFDは、1.44MBと720KBの2種類。EPOC OSはMS-DOS互換のファイルシステムを採用しているため、DOSマシンと違和感なく使用することができる (018)。

Organiser IIが発売された当時、純正オプションとしてのメモリパックは大変高価な製品だった。とはいっても、メモリパック内部には汎用EPROMと若干の外付けI/F回路が入っているのみである。そこで、値段的にも安い汎用のEPROMを直に接続して、データのバックアップを行うことで、コスト削減を図ろうというのが、本製品のコンセプトである。といっても、この格好はないよなあ……まるで試作品だよ、これじゃ…… (020)

## 🌀 おわりに

次に、Psion Organiser II用の小物を入手したのでご紹介しておこう。Organiser II用の周辺機器については、本誌2004年冬号でもいくつかピックアップしてみたが、今回ご紹介する製品はダントツに怪しいモノである (つて、筆者が紹介するモノは、なんだか全て怪しいモノばかりだな…… ^^;)。Jaro Computer Servicesという会社が発売した製品で、ナント！品名、品番不詳という優れもの。とにかく見てもらえれば判る、といった商品だ。簡単に言うと、Organiser IIのメモリバックスロットに装着し、27C256、27C512といった汎用のEPROMにデータを読み書きするためのアダプタである。EPROMは、ゼロプレスソケットを介して搭載する。Organiser IIへは、メモリバックを改造したコネクタで接続する。2基搭載されているメモリバックスロットのうちの1基にこのアダプタを接続することで、内蔵メモリやもう一基のメモリバックの内容を汎用EPROMにコピーすることができるというものだ (019)。

外観はトホホであるが機能面では十分で、デバイスドライバ等何も考えなくても即認識し、書き込み、読み出しができる。本体内部の構造はどうなっているかを確認しようと、裏蓋のネジを外してみたが、内部は樹脂モールドで完全に密閉されていた。きつとメモリバックに搭載されていたI/F回路がそのまま入っただけであろう。コネクタ部分に貼られたシールには、「リード線を持ってコネクタを引き抜くべからず！ 無料消去サービス。詳細はコンタクト願う」との記述あり。また、本体に貼られたシールには、Jaro Computer Servicesの所在地と思われる以下の記載があった (021)。

Jaro Computer Services  
9 Brighton Cl, Addlestone  
Weybridge, Surrey KT15 1PP

古き良き時代、パソコンがまだ面白かった頃を彷彿とさせる、愛すべき小物と言えるであろう……合掌……



020

メモリアダプタの接続状況  
Organiser IIとはこのようにスロットを介して接続する。しかし、無骨というか何と言うか……すごい製品だな



021

メモリアダプタのアップ  
アダプタ部分には製造元の会社名が記載されるのみ。品名すらも書かれていない。雰囲気的にはまるでプロトタイプだ